

清末の日本における中国人留学生同郷会について  
——湖南省留日同郷会の初期活動を中心に——

A study on Chinese Student's Rural Associations  
in Japan at the Late Qing:  
Mainly the activities in the initial period of Student's  
Rural Association from Hunan Province

This article is examined the international student associations established in Japan by Chinese students at the end of the Qing, summarizing the background of their establishment in each provincial community and the publication of magazines. I will examine the associations' specific activities.



# 清末の日本における 中国人留学生同郷会について ——湖南省留日同郷会の初期活動を中心に——

胡 穎

## はじめに

### 1. 「同郷会」という意義について

清末の留学生が日本で組織した各種団体についての研究には、辛亥革命の勃発に関わる団体及びその活動が最も重要視されてきた。しかし、大勢の留学生は同じ組織に入ったわけではなく、日本という異国でなんらかの形でお互いに繋がりがある留学生活を送ったのではないかと思われる。このような繋がりは「校友会」「同窓会」「同郷会」「学友会」のように様々な名称で呼ばれているのである。そのうち、校友、同窓、学友は同じ学校に属している〔在籍中と卒業後の二種を含む〕者の集まりであるのに対し、同郷会は同じ地域〔一つの省や一つの県など〕から来た者の集まりである。同じ土地で生まれ、同じ風俗習慣及びお互いに通じ合う方言などの地縁的な要素は異国で生活している留学生に同じ省や同じ地域に生まれた者として結びつけさせる。ゆえに同じ出身地に対する共通の感情は革命思想や政治理念とは関係なく、同郷会のような同郷組織に参加するモチベーションがあると考えられる。このような意味で、同郷会は他の団体や組織と違い、留学生らが自ずと自然に帰属する特質を持っていると言えよう。これは筆者が留学生のネットワークの中で同郷会に対して最も関心

を持ったところである。

清末の留日学生らは同じ「省」という国の行政制度によって分けられた境界に囲まれる「同郷」に所属しているのが一般的である。しかし、中国は国土が広くて同じ省であっても、言語や習慣も異なっている。省より更に小さい範囲の同じ習慣や同じ方言を持つ者の間では、お互いに「同郷」に対する帰属意識がより一層高い。故に留学生の中に、同じ県或いは近隣の県から来た者が多くなると、様々な同郷会が成立する可能性が出てくる。留日同郷会の中で、例えば湖南省の場合、省出身の全留日学生をまとめる湖南省留日同郷会があり、その下に西路同郷会や南路同郷会が設けられていた<sup>1)</sup>。従って、留日同郷会に焦点を当てて研究するからには、湖南省のような特徴を持つ同郷会を研究するのが最も必要であると考えて、本稿では湖南省の留日同郷会を中心に取り組む次第である。

## 2. 先行研究について

さて、留日同郷会に関する関連の先行研究をまとめておきたい。これまで中国人日本留学生について幅広く論述しているのはさねとう・けいしゅうの著作であろう。しかしながら、氏の著作は留学生の日本生活を紹介する際に、留日同郷会に触れた程度で詳しくは論述していない<sup>2)</sup>。また、小島淑男氏は湖南・湖北・江西などの留日同郷会が英・仏・独三国借款で鉄道を敷設することに反対した様子と、危機に陥った祖国を救うため留日中國国民会や同盟会の主導下、各省の留日同郷会が活動した状況などを述べ

1) 宋教仁著・松本英紀訳注『宋教仁の日記』(同朋舎、1989年)に頻繁に西路同郷会が出て、時々南路同郷会も出ている。宋の出身地である湖南省桃源県は常德府に管轄されている。しかも常德府、辰州府、沅州府、永順府、澧州、靖州及び五庁を含む広い西部地域は西路と呼ばれている(黄東蘭『近代中国の地方自治と明治日本』汲古書院2005年2月169-170頁を参照)。黄興と宋教仁一緒に革命活動をした劉揆一は南路同郷会に属している。

2) さねとう・けいしゅう『増補 中国人日本留学史』、くろしお出版、1970年。なお、『中国留学生史談』(第一書房、1981年)では清国留学生会館の縁起を述べている際に、関連に同郷会は省単位よりももっとこまかいものであったとのように触れた。134頁を参照。

ているが、あくまでも留日学生の辛亥革命を中心に論述しており、同郷会に焦点を当てていなかった<sup>3)</sup>。ほかに留日同郷会によって刊行された雑誌を取り上げる研究も多く見られる。例えば、王鼎の論文は湖北省留日同郷会の機関誌『湖北学生界』を通じ、清末の湖北省留日学生の活動を検討している<sup>4)</sup>。これらの研究はいずれも留日同郷会を中心としたものではなく、留日同郷会の起源や組織及び留学生がどのように同郷会に関わったのかについて、ほとんど触れていない。最近、孫安石氏は清国留学生の全体を対象とした清国留学生会館〔以下、留学生会館と略す〕を取り上げ、さねとう・けいしゅうが引用していない一次資料『清国留学生会館 第一次報告』の記録によって、その組織図や全般の機能などを論述した<sup>5)</sup>、これにより、日本という異国にいる中国人留学生の本拠地である留学生会館のイメージとその機能がより鮮明になった。

一方、中国側での研究では、顏軍氏が新聞紙上で「留日学生同郷会與清末変革」と題する論考を発表し、各省の留日学生同郷会の趣旨や組織及びその活動を概説し、近代的な意味を持つ団体として、清末の社会変化に影響を与えたと評価している<sup>6)</sup>。また蘇全有・王楓氏は清末の同郷会の会員構成、組織とその管理仕組み、その機能を各同郷会の章程や公告によって、比較的詳しく述べている<sup>7)</sup>。だが、氏の論述では、日本に拠点を置いた留

3) 小島淑男『留日学生の辛亥革命』青木書店、1989年。同書の内容は主に辛亥革命が勃発した前後の時期であったが、今後系統的に同郷会を取り上げるには、大いに参考になる。

4) 王鼎「雑誌『湖北学生界（漢声）』から見た清国日本留学生の諸活動」（新潟大学大学院現代社会文化研究科（『現代社会文化研究』第六四期、2017年3月）、「清末留日学生の思想と行動—雑誌『河南』を例として」（孫倩 早稲田大学大学院社会科学研究科『ソシオサイエンス』Vol20、2014年3月）、「『浙江潮』與清末浙江地区公共空間の孕育」（黄秋寧 上海交通大学、修士論文 2014年）など。湖南省同郷会が刊行した『遊学訳編』について、「清末留学生刊行物『遊学訳編』研究—教育交流視点から」（杜京容、華中師範大学、2014年）と「『遊学訳編』與西学の伝播」（陳小亮、湖南師範大学、2015年）二人の修士論文も挙げられる。

5) 孫安石「清国留学生会館研究初探—「国家」と「愛国」のはざま」（孫安石・大里浩秋『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代』東方書店、2019年3月）。

6) 顏軍「留日学生同郷会與清末変革」（顏軍『光明日報』第012版、2009年7月21日）。

7) 蘇全有・王楓「論清末同郷会」（『南陽理工学院学報』第5卷第5期、2013年9月）。

日学生同郷会と清末に中国国内に置いた同郷会を区別せずに論じている。さらに顔氏と蘇氏の研究では、留日学生同郷会の成立背景、各省留日同郷会の下にある地域留日同郷会の仕組み及びそれぞれの活動、留学生個人と同郷会の関係や役割などについてほとんど触れていない。

以上のことから、本稿では湖南省留日同郷会に焦点を当て、留日同郷会の成立背景と全体留日同郷会を概観し、次に留学生数が江蘇、浙江、湖北などその他の省より少なかったにも関わらず、彼らが比較的に早い時期に湖南同郷会を組織して、その機關誌として『遊学訳編』を刊行できた理由などについて分析したうえで、湖南留日同郷会の初期活動を検討してみる。

なお、本稿では、中国人日本留学生の同郷会を留日同郷会と表記しており、特別に説明しない限り、本稿に出る「同郷会」はすべて留日学生の同郷会であると予め断っておく。

## 一、各省の留日同郷会と湖南同郷会の成立について

そもそも留日学生の同郷団体はどういう背景でいつ頃現れたのかについて、中国人日本留学の歴史を振り返りながら述べておきたい。一般的に1896年に来日した留学生13名は中国人日本留学の発端と思われる。彼らは湖北省、福建省、安徽省、広東省など出身地はまちまちであるが、来日後嘉納治五郎が借りた神田三崎町一丁目二番地の一軒家で教室兼寄宿舎の団集生活を送った<sup>8)</sup>。同学の集まりである<sup>9)</sup>。その後、清政府の正式な留学生派遣政策が頒布される前の1898年5月に浙江省の求是学院の4名〔浙江省出身〕が日華学堂に入學し、武備学堂の4名〔二人は湖南省出身、二人は湖北出身〕が成城学校に入學した。さらに1899年1月に上海南洋

8) 前掲『増補　中国人日本留学史』37頁を参照。

9) 呂順長『清末中日教育文化交流之研究』北京商務印書館、2012年169頁を参照。

公学の6名〔二人は浙江省出身、二人は江蘇省出身〕が日華学堂に入学した<sup>10)</sup>。1899年1月に北洋大臣によって派遣され日華学堂に入学した12名のうち、直隸省出身は4名で、広東省出身は3名で、江蘇省は2名、浙江省、福建省、安徽省は各1名であった<sup>11)</sup>。これら日華学堂に入った留学生は日華学堂の寄宿舎にて寄宿生活を送った<sup>12)</sup>。一方、同時期に湖北省などの武備学堂から派遣された陸軍留学生は成城学校に入り、同じく寄宿生活を過ごした。成城学校の学友の増加に伴い、成城学校の留学生らはいち早く校友会を作った<sup>13)</sup>。このように一つの省内の同じ学堂から派遣されても出身地が異なることから、同郷の繋がりがほとんどないといえる。

1900年春になると、初めての留学生団体と言われる「励志会」が組織された。出身省は江蘇（12）と浙江（10）が多くを占め、その次に直隸、湖北、広東、安徽、湖南、福建などであった<sup>14)</sup>。宗旨は留学生がお互いの「感情を連絡し、志を励む」<sup>15)</sup>で、政治的な目的ではなく、異国にいる同国人が親睦を深めるための会と言えよう<sup>16)</sup>。なぜなら、故郷から離れた地理的な距離の拡大によって、同郷の枠も広げる。いわゆる、州や県を出たら同じ州や県の出身者が同郷といい、省を出たら同じ省の出身者が同郷といい、国を出たら同じ国の者が同郷（同胞というべきである）ともいう。特に留学生が少ない時期〔1900年の後半の推計で百数十人〕、省の枠

10) 章宗祥と富士英は浙江省出身で、雷奮、楊廷棟、楊蔭杭と胡祿泰は江蘇省出身である。前掲『清末中日教育文化交流之研究』197頁。

11) 拙稿「清末の中国人日本留学生に関する研究」（『言語と文化論集特別号』2017年3月）92～93頁を参照されたい。

12) 柴田幹夫「『日華学堂日誌』1898～1900年」「『新潟大学国際センター紀要』第9号、2013年）を参照。

13) 『清国留学生会館第一次報告』（清国留学生会館、1902年）の「図書録存」には「成城学校校友会撮影」という記録がある。

14) 張玉法『清季の革命団体』中央研究院近代史研究所専刊32、1982年、253～255頁を参照。

15) 同上。

16) 励志会について、郭夢垚『清末中国人日本留学生の初期活動について—励志会と訳書彙編社を中心に』（孫安石・大里浩秋『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代』東方書店、2019年3月）が詳しい。

を問わず同じ国の者は日本という異国でお互いを同胞のように考えたのだろう。

1901年より各省から派遣された留学生が徐々に増加し266名に上り<sup>17)</sup>、1902年上半期の統計によれば、各省の留学生数は下の表1に示しているように、江蘇省が115名で最も多く、その次に湖北省と浙江省が百名に近く、湖南省の人数は広東省と安徽省の後の42名である。このように増え続けた留学生の人数は省単位で団体を作る必要性が出てきたと言える。一方、義和団事件で中国は列強に分割される危機に陥って、「國の将来を憂え、「愛國」精神を發揮」<sup>18)</sup>することになった。「愛國」と同時にともと各省への帰属意識の強い留学生は「愛國は必ず故郷を愛することより、國を興すには必ず故郷を興すことより」<sup>19)</sup>と指摘されたように故郷に対する思いをより強くすることになった。このような背景で各省留日同郷会が現れたと見られる。

ここで、各省の留日同郷会の成立を述べる前に、清国留学生全体を対象とした留学生会館の成立に触れておきたい。留学生会館の成立背景については、すでに実藤恵秀は「日本という外国にきてみると、「中国人」として共通の利害が生じてくる。そうなると、団結の必要がおこる。団結する

表1〔1902年（光緒二十四年一月から八月）各省の留学生人数統計〕

江蘇	湖北	浙江	広東	安徽	湖南	福建	旗籍	直隸
115	85	84	60	46	42	31	31	25
四川	山東	江西	貴州	河南	奉天	陝西	広西	山西
14	10	9	7	7	2	2	2	1

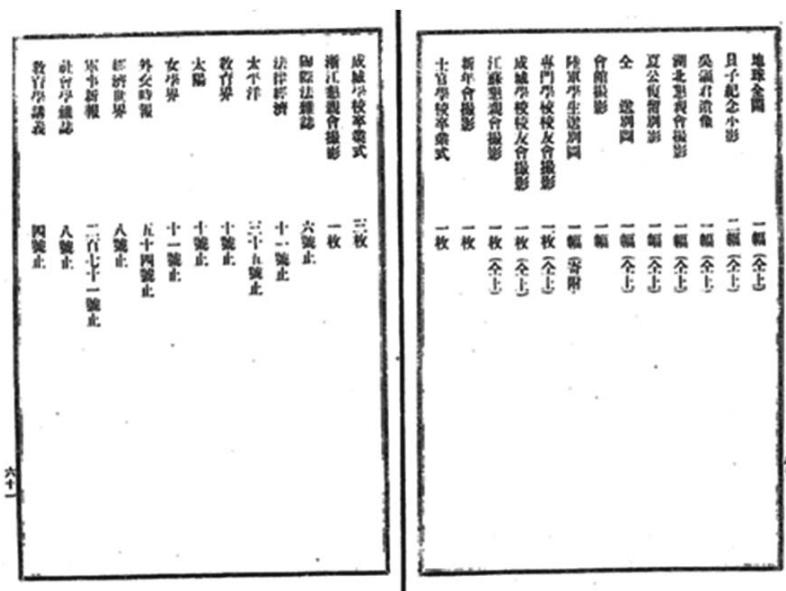
（出典、『清国留学生会館第一次報告』に基づき作成したものである。）

17) 王奇生『中国留学生的歴史軌跡』湖北教育出版社、1992年、95頁。

18) 前掲孫安石「清国留学生会館研究初探—「国家」と「愛國」のはざま」、9頁。

19) 朱發建・張晶萍「認同與批判：清末留日学生の地域文化觀」『安徽史學』、2015年、第3期、28頁。

1



(出典:『清国留学生会館第一次報告』「図書録存」60~61頁)

には、みんなの集まりの場所がいる」<sup>20)</sup> というように指摘しており、留学生の増加に伴い、日本という異国で留学生の全体を代表する組織及び集会の場が必要であったと言えよう。1901年より留学生の中で留学生会館を成立させる訴えがあり、駐日公使蔡鈞、留学生監督錢恂、当時の安徽遊歴官の身分で来日した李宗棠などの支持を受け、留学生の章宗祥、呉振麟、金邦平、范源濂などを中心に留学生会館の「章程」や「会館規則」を起草・議論を経て、1902年2月21日に二百名以上の留学生が参加した開館式が行われた<sup>21)</sup>。

留学生会館が開館した時点で、各省の同郷会はまだ正式的に成立してお

20) 前掲『増補 中国人日本留学史』195~196頁。

21) 清国留学生会館の成立経緯について、前掲さねとう・けいしゅう『中国留学生史談』と孫安石「清国留学生会館研究初探—「国家」と「爱国」のはざま」が詳しい。

らず、留学生会館の開館に伴い相次いで組織されたと言える。資料上で各省の同郷会の動きが最も早く確認できたのは1902年10月5日に刊行され、留学生会館の成立を巡る諸記事や留学生統計（1902年2月～9月の間）をまとめた『清国留学生会館第一次報告』である。当該報告の「図書録存」（図1）に「湖北懇親会撮影 一枚」、「江蘇懇親会撮影 一枚」と「浙江懇親会撮影 一枚」と書かれ、三省の懇親会の写真が留学生会館に保管された。すなわち1902年9月までに湖北、江蘇、浙江の三省の同郷人はそれぞれ集まって懇親会を開いていたことが分かった。しかも1902年の時点でこの三省は前表1で示しているようにいずれも留学生数がトップ三位を占めており、同郷人の懇親大会を開いたのは当然であろう。

ところで、湖北、江蘇、浙江三省が同郷人の懇親大会を開いたことは、それぞれの同郷会が成立したことを意味したのか、この点について、三省の同郷会がそれぞれ刊行した機関誌に載せた同郷会縁起や創刊詞などから若干窺える。まず、湖北省留日同郷会の機関誌としての『湖北学生界』第1期は1903年1月29日に発行され、同誌に掲載された「湖北同郷会縁起」は次のように書かれている。

わが楚地〔湖北省を指す〕から日本の東京に遊学してきた者がすでに百人近く、今年四月〔1902年4月〕<sup>22)</sup>に同郷会を組織し始めた。隔月に一回集会をする。〔同人〕各自は専門学を以て、自己管理の大義に従い、お互に励みあう<sup>23)</sup>。

この縁起から湖北省の留日学生は1902年4月に同郷会を組織したことが分かる。さらに同誌に載せられた「湖北同郷会章程」の第9章「開会方

22) 雑誌発行時期から考えれば、「今年四月」とは前年1902年を指す。「湖北同郷会縁起」を書いたのも1902年内になることが分かる。

23) 「湖北同郷会縁起」（『湖北学生界』第1期、1903年1月29日）。

法」に「毎年一回同郷人の懇親会を開き、普段は2ヶ月に一回会議を開く」、「懇親会大会は春季に行い、平常開会は隔月の初週の日曜に行う」<sup>24)</sup>と決められているように、年に一回の同郷人懇親会大会は春季に行うことが分かった。故に、上述の湖北懇親会写真は1902年4月に湖北留日同郷会が成立した際に撮られたものと確認できる。すなわち、湖北留日同郷会は1902年4月に組織され、機関誌の刊行は1903年1月である。

江蘇省の場合は、同郷会の機関誌としての『江蘇』第1期が1903年4月27日に刊行され、同誌に載せている「江蘇同郷会創始記事」につぎのように記されている。

我が国が日本留学を唱えて以来、江蘇は辺海地として、〔日本〕に来る者が最も多い。今年正月、わが江蘇は日本の東京に留学している者が百数十人に上った。〔同郷会を〕草創することが決まり、同人の多くはそれに賛成したため、今年正月某日に麴町区の富士見楼に集まった。参加者は百余名で、〔中略〕午後、役員選挙を行い、雑誌編集者を選んだ。会議終了後、近くの空き地で撮影して散会した<sup>25)</sup>。

上記の内容から見れば、江蘇省は1903年正月に同郷会を正式に組織したと推測できよう。時期からみれば、前述した「江蘇懇親会撮影」(1902年9月前に撮った)はこの時に撮った写真と違うものであろう。すなわち、1902年夏以前に江蘇省の留学生らがすでに懇親大会を開いた。但し、江蘇省の場合、まず全省の留学生の懇親大会を開催し、数ヶ月を経て本格的に同郷会の組織を成立させ、機関誌を刊行するまでに至った。

24) 同上。

25) 「江蘇同郷会創始記事」(『江蘇』第1期 1903年4月27日)。なお、「江蘇同郷会創始記事」には「今年正月」という記述から1903年の正月を指すことが理解できよう。しかし、江蘇省の留学生らが懇親大会を開いたのは、『清国留学生会館第一次報告』の統計時期 1902年9月の前である。

また、浙江省の場合は1903年2月に発刊された『浙江潮』に「浙江同鄉会簡章」を載せている。「簡章」には「冬と夏に懇親会を一回ずつ開く」と決められ、さらに簡章を定めた時期も「光緒二十八（1902）年冬十月本会同人議定」と書かれている<sup>26)</sup>。故に浙江省の場合、1902年夏浙江省の留学生の懇親大会を開き記念写真を撮影し、同年の冬に同郷会の章程を議定し、翌年の2月に機関誌を刊行した。

以上のように、この時期の留学生数が各省の中で上位三位の湖北省、江蘇省、浙江省は、1902年に同郷人の懇親会を開いた。その後、同郷会を正式に組織し、機関誌を創刊した。但し、同郷会の機関誌としての雑誌を

（表2）（各省留日同郷会の成立および刊行雑誌一覧表）

同郷会省別名	成立時期	創刊雑誌名	刊行年月日	備考
湖北省留日同郷会	1902年4月	『湖北学生界』（『漢声』）	1903年1月29日	計8期
江蘇省留日同郷会	1903年正月	『江蘇』	1903年4月	計12期
浙江省留日同郷会	1902年冬	『浙江潮』	1903年2月17日	計12期
湖南省留日同郷会	1902年11月	『遊學訣編』	1902年11月14日	計12期
		『湘路警鐘』	1909年7月	1期（非売品）
直隸省留日同郷会	1903年	『直説』	1903年2月13日	2期のみ
安徽省留日同郷会	1903年	未確認		「安徽同郷会草章」は『警鐘日報』（1903年6月22日～23日）に掲載された。
福建省留日同郷会	1903年	未確認		
四川省留日同郷会	1904年	『鵠声』	1905年9月	計12期
		『四川』	1907年11月	3期のみ
広東省留日同郷会	1903年～1904年	『梅州』	1908年11月	計2期 広東梅州人が東京で創刊。

26) 「浙江同郷会簡章」（『浙江潮』第1期、1903年2月17日）。

広西省留日同郷会	1903年 ～1904年	『粵西』	1907年11月	不明
山西省留日同郷会	1904年	『第一晋話報』	1905年7月	計9期
		『晋乘』	1907年9月	計3期
		『国報』	1908年2月	計2期
雲南省留日同郷会	1905年 3月前	『雲南』	1906年10月	計23期
		『演話』	1908年1月	計5号
江西省留日同郷会	1905年 3月前	『江西』	1908年7月	計3期
河南省留日同郷会		『豫報』	1906年11月	計6期
		『河南』	1907年12月	計9期
陝西省留日同郷会		『閻隴』 (前身『秦隴』 1期)	1908年1月 1907年	計1期 (陝西・甘肅留学生発刊)
		『夏声』	1908年2月	計9期
貴州省留日同郷会	1905年			1905年3月15日『大陸報』に貴州同郷会の情報があった。
東三省留日同郷会				小島淑男『留日学生の辛亥革命』によれば、1910年3月に成立した留日中国国民会に東三省同郷会代表を国内に派遣された。 (小島淑男『留日学生の辛亥革命』)

〔本表は『辛亥革命時期期刊紹介』(第1～3集)、『湖北学生界』、『江蘇』、『浙江潮』、『直説』、景梅九『留日回顧』、『警鍾日報』、『政法学報』、両広留日同郷会編『両広留学生姓名録』、桑兵主編『辛亥革命稀見文献彙編』、『大陸報』などを参考にして作成した。表にまとめた各省留日同郷会の成立時期については、清国留学生会館のような成立大会の成立時期が明確に書かれた資料がほとんど少ない。湖北省、湖南省、浙江省、江蘇省及び安徽省については同郷会章程が確認でき、成立時期はほぼ明らかであるが、他の省の成立時期については、『大陸報』などから東京留学生の同郷会に関する新聞記事を手掛かりにして推測したものであり、今後更に検証する必要がある。河南省、陝西省、東北三省については成立時期を知る手がかりとなるものさえまだ見つかっていないため空欄にしている。〕

創刊したのは三省とも 1903 年以降となった。つまり正式に同郷会章程の発布と機関誌の刊行までに数ヶ月かかっている。他省も三省の後に相次いで同郷会を成立させ、機関誌を創刊した。その状況を表 2 にまとめている。

表 2 に示しているように、留学生が増える 20 世紀初期には、ほぼすべての省は留日同郷会を作った。同郷会は各省の留学生人数の増加に伴い、湖北、浙江、江蘇をはじめにその他の省も後に続いて設立したという状況である。しかし、早期に創刊した雑誌は（『江蘇』、『浙江潮』、『遊学訳編』、『湖北学生界』、『直説』）1 年或いは 1 年未満に早々に廃刊された。1903 年から 1904 年の間に安徽、山西、広東、広西、福建、四川などの留日同郷会が相次いで設立された。その後 1905 年より各省の留学生が激増して、貴州、陝西、河南、雲南、東三省の同郷会も現れた。なお、ここで特筆すべきは 1905 年 8 月に東京に同盟会が設立した後、その影響力を拡大するため、多くの留学生を同盟会に入会させ、各省の同郷会会員の多くは同盟会の会員となり、同郷会の名目で刊行した雑誌が革命思想の宣伝基地にされたということである。例をあげると、河南同郷会の場合、1906 年 11 月『豫報』を創刊したが、革命に不利な内容があるという理由で同盟会河南支部により廃刊させられ、新たな雑誌『河南』を河南支部の機関誌として刊行し革命思想を宣伝した<sup>27)</sup>。

次に、湖南省の同郷会の成立について具体的に見ていく。前表 1 に示しているように湖南留学生は 1902 年 11 月 14 に湖南省同郷会の機関誌『遊学訳編』を刊行した。この機関誌『遊学訳編』から 1902 年 11 月に湖南省懇親会大会の集合写真を撮ったことが確認できた<sup>28)</sup>。湖南省同郷会大会と雑誌創刊の準備及び発刊は同時進行していたことが分かる。このような動きで、湖南省同郷会は 1902 年 11 月 14 日に他省よりも早く機関誌

27) 『辛亥革命在河南』（河南人民出版社、1981 年 1 月）58 頁を参照。なお、前述の孫倩の論文が詳しい。

28) 「壬寅冬孟同郷会撮影」（『遊学訳編』第 12 期）。

『遊学訳編』を刊行したことになる。但し、『湖北学生界』第1期に「湖北同郷会縁起」と「湖北同郷会章程」を掲載したのとは異なり<sup>29)</sup>、湖南省同郷会は機関誌の第1期に「湖南懇親会草章」〔湖南懇親会と称したが、実際に同郷会を意味している場合が多い。本稿では湖南同郷会という。なお、以下は「草章」と略す。〕を載せず、1902年12月14日に刊行した第2期に載せた。『遊学訳編』第1期に「草章」を載せなかった理由の一つとして考えられるのは、『遊学訳編』の刊行までに「草章」の形を完成できなかったからだと思われる。このような状況からみると、湖南省同郷会が急いで雑誌を刊行した様子が窺える。同時期の江蘇、湖北、浙江三省に比べると留学生数が多くないにもかかわらず、湖南省がいち早く同郷会の機関誌を刊行した理由が、注目される。実は、湖南省の早期留学生らは戊戌変法の前に維新や自治などの進歩な思想に接触し湖南を全国の模範にしようとしていた点にあると考えられる。この点について次章で述べる。

## 二、湖南省同郷会の組織と関連人物及び主張

次に湖南省同郷会の組織を「湖南懇親会草章」から見てみよう。

一名称、本会は日本に居留する湖南留学生及び同省の遊歴官紳により成立されたため湖南懇親会と称する。

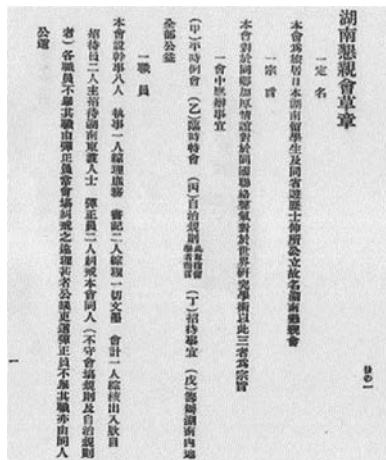
一宗旨、本会は同郷人に対し情誼を深め、母国に対し情勢を連絡し、世界に対し学術を研究するという三つとする。

一會議で処理すべき事項、(甲) 平時例会、(乙) 臨時特会、(丙) 自治規則〔此れは湖南省留学生に自律させることを指す〕、(戊) 湖南省内のす

---

29) 『湖北学生界』と同じように、『浙江潮』も第1期に「浙江同郷会簡章」を載せ、『江蘇』も第1期に「江蘇同郷会創始記事」を載せた。

図2「湖南懇親会草章」



(出典：『遊學訳編』第2期より)

べて公益事業を準備し取り掛かること。

一職員、本会は幹事八人、執事一人で庶務を総理する、書記二人ですべての記録を担当する、会計一人で支出経理を担当する、招待員二人で主に湖南省から日本に来る者を出迎えする。(略)

一選挙、(甲) 各職員は開会日投票の方法によって5票以上を取った者が当選する。各職員は半年ごとに改選する。(略)

(乙) 集会は毎月第三の日曜日を例会とする。(略)

一経費、月払いと臨時払いの二種に分ける。一人毎月日本円20銭を会費とす。臨時払いは同人の集会で認められる必要があり、但し重大な事項に限る。

一会員の果たすべき責務 一遊學訳編は現に湖南編訳社に属し、すべての費用を編訳社から支出する。但し今後の翻訳義務を各会員が分担し続け、更なる進歩を望む。(略)

一会場 本会は暫く日本東京小石川区久堅町七十一番地湖南編訳社を会

場とす。書簡の往来はすべて此処にする。今後移転があれば本（遊学）訳編で改めて告知する。

（以下略）

上記の規則に明らかなように、湖南省同郷会は同郷組織として同郷人の感情を深める一方、母国的情勢を注目し、世界の先進学術を研究する主旨で、本省出身の留学生に対して自主監督・管理の責任を負い、湖南省内の公益事業まで企画し参画していく。組織と役員の選挙法は留学生会館を模範にし、民主的に運営されている一面がある。全員毎月支払う会費で基本的な機能を維持している。もともと湖南省同郷会が運営している遊学訳編社は途中から湖南編訳社に帰属され、湖南編訳社の分社として機能して湖南同郷人が編集や翻訳を担当し続けた。

ここで湖南編訳社について補充する。さねとう・けいしゅうの著作では、湖南編訳社は留日学生の翻訳団体として、訳書彙編社〔1900年創設〕と教科書訳輯社〔1902年創設、訳書彙編社の分社とも言われる〕のあとに紹介しているが<sup>30)</sup>、具体的にいつ創設されたのかには、触れられていないかった。確かに、資料の限りでは明確な記録が確認できないため、推測するほかない。「湖南編訳社」という名称は既に第1期『遊学訳編』の印刷所として登場しており、第2期『遊学訳編』になると、冒頭の「本社同人啓」には「現在同郷人はまたわが国民のため、政法、工芸及び各教科書を編訳する湖南編訳社を設け、本〔遊学〕訳編はすぐ〔湖南編訳社〕の編集部に併入する。合併する前に議定した簡章も少し修正を入れた」というように書かれている<sup>31)</sup>。故に、湖南編訳社は『遊学訳編』を創刊した時にすでに創立の準備に入って、訳編の第2期を刊行する前に創設されたと言

30) 前掲『増補 中国人日本留学史』266~267頁。

31) 『遊学訳編』第2期。

えよう。すなわち、1902年11月～12月頃に創設された。その趣旨は「湖南編訳社章程」によれば、湖南編訳社は東西の有名な書籍（学問的な書籍を指す）を翻訳し、各学校の教科書を編集することを目的としている<sup>32)</sup>。湖南編訳社は「日本東京小石川区久堅町七十一番地」<sup>33)</sup>にあり、しばらく湖南省同郷会の会場、遊学訳編の編集部も置かれた。

要するに、湖南省同郷会は湖南省留日学生の同郷組織であり、同郷人が『遊学訳編』の編訳を担当している。遊学訳編社を合併した湖南編訳社は教科書や書籍などの翻訳を主としていた。雑誌の編集と書籍や教科書の翻訳をする者の多くは同じメンバーであると見られる。

前述したように1902年頃湖南省の留日学生は多くないため、留学生会館第一次報告により確認できる。一方、雑誌の編訳に関わる留学生は、全員ではないが、第2期『遊学訳編』の「遊学訳編第二期訳員表」が携わった人の手掛かりになる。その訳員表を基に、『遊学訳編』に載せた文章の署名も入れて作成したのは表3である。

表3に示しているように、最も早く来日したのは1899年10月の周宏業である。その後来日したのは1900年9月に1人、1901年10～11月に3人、1902年1月～9月に6人である。すでに1900年成立された訳書彙編社で活躍した浙江省や江蘇省などの留学生より来日が遅かった。しかし、湖南省同郷会及びその機関誌に関わった留学生らが来日する前の湖南省の情勢と彼らの履歴を見逃すことはできない。以下に戊戌変法前後の湖南省の情勢を概観し、主な人物の履歴に触れておきたい。

1898年の戊戌変法の前より、湖南省はすでに維新の思潮を起こしている。1897年10月に湖南巡撫陳寶箴の支持下、湖南省に最も早く新式学堂の時務学堂が創設された。この時務学堂は維新派の人物梁啓超を雇い、中

---

32) 前掲『湖北学生界』（第1期）。

33) 前掲「湖南懇親会草章」。

表3 (『遊学訳編』の編訳者表)

氏名	字	湖南出身地	来日年月日	時の在籍学校	備考
周家樹	仲玉	寧鄉	1901年11月	成城学校	「学術」「軍事」翻訳担当
黃軫(興)	杞園	善化	1902年6月	弘文学院	「教育」担当
周宏業	伯勛	湘鄉	1899年10月	早稻田大学	「理財」担当
曾鯤化	博九	新化	1902年1月		「時事」担当
梁煥彝	鼎甫	湘潭	1901年10月	成城学校	「時事」担当
楊毓麟	篤生	長沙	1902年4月	清華学校	「歴史」担当
范銳	旭東	湘陰	1900年9月	熊本土木学校	「地理」担当
許兼	紹周	善化	1902年9月	清華学校	「外論」担当
張孝準	潤龍	長沙	1901年10月	成城学校	「世界大勢一班」担当
陳潤霖	夙荒	新化	1902年4月	弘文学院	第1期「教育」翻訳担当、第2期帰国中
楊度	皙子	湘潭	1902年5月	弘文学院	『遊学訳編』の作者

(本表は『遊学訳編』第2期の「遊学訳編第二期訳員表」に基づき、『清国留学生会館報告』を参照し、他期の関連箇所を加え作成したものである。)

文総教習を担当させた。梁啓超は時務学堂で学生に自国の史書などを必読書として読ませながら、法律などの専門学を勉強させた<sup>34)</sup>。さらに『時務報』〔1896年8月～1898年8月〕などの維新思想を宣伝する新聞や雑誌まで読ませた。教え子に深く影響を与えたとみられる。一方、湖南省出身の譚嗣同や唐才常などと一緒に南学会を組織し『湘報』〔1898年3月～10月〕を刊行し、地方自治の意識も芽生えさせた。維新派らは湖南省を中央政府から独立させるという地方自治の政治主張を湖南巡撫にも建言したというほど、湖南省では早くに省の自治を実施しようとした動きがあった。

1898年戊戌運動が失敗したあと、時務学堂も停止された。もとの学堂

34) 林增平ほか編著『湖南近現代史』湖南師範大学出版社、1991年、200～202頁を参照。

生 11 人は、すでに日本に亡命した梁啓超に呼ばれて、1899 年に日本にやってきた<sup>35)</sup>。そのうち 1900 年に唐才常が組織した自立軍の武装蜂起に参加した時務学堂の学生 4 人は命を失った。残った蔡鍔、秦力山、范源廉、周宏業、唐才質などはいずれも積極的に活動した人物である。

表 3 に示している周宏業は時務学堂の梁啓超の教え子の一人で、1899 年來日後周宏業は周達という名前で矢野文雄の『経国美談』を翻訳し、梁啓超が創刊した『清議報』（1898 年～1901 年）に連載された。彼は早くも翻訳の経験を有し、出身省の雑誌『遊学訳編』の編訳に積極的に関わったと言える。

表 3 に示している歴史を担当した楊毓麟は、『遊学訳編』の主な編訳者と言われる人物である。楊毓麟は別名楊守仁、字篤生、1872 年長沙県生まれ、1897 年に科挙の試験に合格し举人になった。文才があり改革に熱心で、同年時務学堂の教習を務めた。その後、梁啓超、唐才常、譚嗣同と共に変法を提唱した。また『湘学報』〔1897 年 4 月創刊、戊戌変法後停刊〕に投稿し、維新運動の支持者となり、維新運動に失敗した後、1902 年 4 月に来日し清華学校に入った<sup>36)</sup>。彼は広東省出身の維新派人物である欧榘甲が書いた『新廣東』の影響を受け、その後 1902 年冬『新湖南』を出版し、1903 年「湖南之湖南人」の署名で単行本を刊行した<sup>37)</sup>。欧榘甲の『新廣東』には、広東人が廣東のすべてを管理し、廣東自立の勢いを築き、中国全体の自立のスタートとすると主張しているように、楊毓麟は湖南省が清政府から独立することは湖南人の切実な願いとなり、独立した政府を設け、独立した地方自治制度を行うべきであると主張している<sup>38)</sup>。

35) 林逸撰『民国蔡松坂先生鍔年譜』〔新編中国名人年譜集成 第 21 輯〕台湾商務印書館発行、1987 年 10 月初版、19 頁。

36) 饒懷民編『楊毓麟集』、岳麓書社、2001 年、2～4 頁を参照。

37) 同上。29 頁。

表3の「教育」を担当する黃興は、湖南省出身で、1902年湖北省兩湖書院の官費留学生として弘文学院の速成師範に入った。日本へ留学する前の学業を修める時代の黃興は、「授業外の時間に西洋革命史やルソーの『民約論』などを、よく読んだ。革命思想を徐々に吸収し、クラスメイトなどに一言も言わず」<sup>39)</sup> というように書かれている。革命思想に早くから接触していたと思われる。弘文学院時代の黃興について同級生の回想に、次のように述べられている。

この時から革命に志し、時間がある時には日本陸軍連隊の操練を見学した。同時期に楊度も弘文学院に在学し飯田町に住んでいた。黃興はよく訪ね、湘籍の学生と革命について話した。楊度の下宿はまもなく「湖南会館」或いは「留日学生俱楽部」となった<sup>40)</sup>。

このような記述から黃興が革命に关心を持ったことや同郷人との付き合う様子が窺える。維新派のような主張と違ったが、湖南という故郷に対する感情はほかの留学生と同じであろう。なお、この時期の黃興は「学校行政論」を翻訳し『遊学訳編』第2、3期に連載された<sup>41)</sup>。

なお、表3には蔡鍔の名前がなかったが、彼も日本で積極的に活動した湖南人の一人である。彼は時務学堂の時から梁啓超の影響を受け、1899年日本に来て成城学校に入った。梁啓超が創刊した『清議報』〔1898年～1901年〕に投稿し、1902年2月に梁啓超が新たに創刊した『新民叢報』に「軍国民篇」を発表し、「軍国民主義」を紹介したうえで、国内でも普

38) 同上。

39) 原文は黃蔡二公事略編輯處『黃克強先生榮哀录』によるが、本稿では毛注青『黃興年譜』（湖南人民出版社、1980年、）15頁を参考。

40) 李雲漢撰『黃克強先生年譜』台湾中国国民党中央委員会党史委員会、1984年、42頁。

41) 『遊学訳編』には署名がなかった。台湾中国国民党中央委員会党史委員会の『黃克強先生全集』（1973年増訂）8頁を参照した。

及させることを主張した<sup>42)</sup>。また蔡鍔は、『遊学訳編』には湖南留学生一同という署名で「致湖南士紳諸公書」を発表し、湖南省の知識人に建言している。その主旨は次のような。

西洋の書籍を直接訳すのは困難である。早く仕上げやすいのは日本の〔すでに日本語に訳された〕書籍を訳すほかない。

とにかく湖南省が変化を起こしたら、全国も続いて変化していく。

最近、各省はお金をを集め訳書に力をいれている。わが湖南は他省が先にするのを許すべからず。訳書が重大な意義を持つからである。全国の教育章程、科学及び理法、実業のため、或いは湖南省全省の修学〔教科〕をまとめるためなどである<sup>43)</sup>。

ようするに、湖南省から率先して湖南省ないし全国の教育章程に関わる教科書などを翻訳して、全国に変化を与えることを狙っている。

1903年4月6日の『蘇報』には東京にいる某留学生の手紙一部を載せ、次のように湖南省留学生と『遊学訳編』について述べている。

今頃留日学生の中で湖南省の（留学生）が一番いいのである。…眞にみんな上等な思想を持っている。『遊学訳編』はすでに千部以上売れている。浙江省（の留学生）には人材が多いが、惜しいのは心がバラバラであることだ。しかし、刊行した『浙江潮』はとても良い。江蘇省はあまりよくないようで、『江蘇報』は未だに出版されていない。（略）

このように湖南省の留学生を評価している。上述したように、周宏業、

42) 毛注青ほか編『蔡鍔集』（湖南人民出版社、1983年）11頁、19～38頁を参照。

43) 『遊学訳編』第3期、（一九〇三年一月一三日）。

表4(湖南編訳社の創立者)

氏名	出身地	来日年月	在籍学校
黄軫(興)	湖南省善化	1902年6月	弘文学院
許直(玉屏)	湖南省善化	1902年4月	清華学校
陶惺孝(涵宇)	湖南省寧鄉	1902年12月	振武学校陸軍
陳范(夢波)*	湖南省衡山		『蘇報』後継者、「蘇報案」後日本に亡命
李振鐸(曉邨)	湖南省邵陽		
魏肇文(選廷)	湖南省邵陽	1902年11月	成城学校
楊毓麟(篤生)	湖南省長沙	1902年4月	清華学校
張孝準(潤龍)	湖南省長沙	1901年10月	成城学校

(本表は「湖南編訳社集金簡章」(『湖北学生界』第1期)や馮自由『革命逸史』初集を参考に作成した。)

\*『蘇報』[1896年創刊され、1900より陳范が引き継いだ]案は1903年6月頃に発生した。陳范は清政府の逮捕から逃げるために日本に亡命したはずだが、湖南編訳社は1902年11月~12月に創設され、翌年の1月に『湖北学生界』に章程などを刊行されたのである。時期は合わない。なぜ湖南編訳社の創立者のリストに陳范の名前があるのか、今後更なる検証する必要がある。)

楊毓麟、蔡鍔などは日本に来る前にすでに維新派に影響され、湖南省を自ら治める思想の基礎を備え、湖南省から日本への留学生派遣は遅かったが、湖南省を自立させ湖南人により經營していくという意識が強かった。このような湖南人が早く機関誌『遊學訳編』を刊行したのは理解できよう。

前述した湖南編訳社も主に日本にいる湖南留学生が創設した。その創立メンバーは表4の通りである。

表4に示している黄興、楊毓麟、張孝準三人は『遊學訳編』の編訳も担当している。『遊學訳編』第8期の附録に「邵陽魏肇文」という署名の「與邑人書」が載っているが、湖南編訳社の訳書と『遊學訳編』の編訳の両方に関わっている者は少なくない。前述した蔡鍔は上記の名簿にはないが、実際運営に関わった人物の一人である。

### 三、湖南省留日同郷会の初期活動

1902年11月に湖南同郷会が成立した時、会場としてはしばらく湖南編訳社の所在地である「東京小石川区久堅町七十一番地」に置かれた。ここは1903年8月まで『遊学訳編』総社の場所でもあった。その後、『遊学訳編』（第5期より）の編輯部は清国留学生会館所在地の「東京神田区駿河台鈴木十八番地」に移転されたが、第10期の編輯部は「牛込区喜久井町廿番地」に移り、第11期と12期の編輯部は再び留学生会館に移った。湖南同郷会の雑誌編輯者は留学生会館を活動の場所としており、この時期の『湖北学生界』、『浙江潮』、『江蘇』の編輯部と同様に会館をよく利用していた。しかし、同郷大会の詳細な関連資料がないため同郷大会の開催日は不明だが、『遊学訳編』（第12期）には上記した1902年11月の同郷大会の写真以外に、1903年春季と秋季の同郷大会の写真があり、年に二回同郷大会が開かれたことが分かった。

同郷会は『遊学訳編』を利用して省内の同郷人に留日生活を発信して日本留学を勧誘した。例えば湖南寄郷の留学生周家純は「致湖南青年勧遊學外洋書」（第4期）と題して、世界に遅れている我が国や吾郷のために、吾郷の少年が遊学を通して見識を広げるべきと熱く語り、また無署名の「勧同郷父老遣子航洋遊學書」（第6期）には、日本への留学が困難だと思う同郷の父兄に対して、12項目に区分した丁寧な回答や、特に遊學費用について各州や県の公費を利用できるという方法まで示している。また「與同志書」（第7期）にも、一刻を待たず早く日本留学の準備をすべきだと強く勧めている。その結果か、湖南省の留学生は年々増え続け、1903年には106名、1904年には373名にも上った<sup>44)</sup>。このように同郷人に向

44) 前掲『清国留学生会館第四、五回報告』より確認した。

けた勧誘活動はある程度の役割を果たしたと言える。

ところで、湖南留日同郷会は、湖南に関わった事件などに対してどのように対応したのか、大阪博覧会人類館への調査事件（『遊学訳編』第6期に長文で掲載されている）を一例に見てみよう。1903年3月1日より大阪の天王寺公園で開催されていた第五回内国勧業会、いわゆる大阪博覧会には、3月10日に開館された「学術人類館」（北海道アイヌ、台湾の原住民、琉球、印度などの人情、風俗を紹介する場所、もともと清國の人情や風俗の紹介も計画されたが、留学生らの反対で取り消された。）に中国服を着て纏足した台湾の女性がいた。この女性は湖南人だという噂が広がった。それを聞いた清國から来た遊歴員は、神戸駐在の領事館に報告したが、領事館からはなす術がないという答えであった。遊歴員は更に東京に行き駐日公使に報告したにも関わらずまた同じ答えであった。この時、ちょうど湖南留学生が同郷大会を開いており、遊歴員が駆け付けて聞いたことを湖南留学生の前で打ち明けた。同省留学生らが「日本人があまりにも我々を侮辱するから、我々が必ず戦う」と怒り出したが、「この女性が果たして湖南人かどうかはまだ知らず。その由縁を詳しく調べないと、打つ手がない」という。湖南同郷大会では、まず噂の女性が本当に湖南人かどうかを確かめるため、前述した湖南同郷会の中心人物の一人である周宏業を派遣して調べてもらうことを決断した。派遣された周宏業は直ちに大阪に赴き、女性本人に直接身分を聞き、また展示館の幹事にも面会して、湖南人ではないことを判明させたうえで、展示館の幹事の証明書をもらって東京に戻った<sup>45)</sup>。このように湖南同郷会は湖南人に関係した国家・民族の名誉にかかわる出来事の解決に向けて、同郷組織としての役割を見せた。

湖南同郷会の初期活動は何より『遊学訳編』を刊行したことである。『遊学訳編』は1902年11月14日に第1期が発行され、毎月旧暦の15日

45) 『遊学訳編』第6期、1903年4月12日。

に刊行された月刊誌であり、1903年11月3日第12期まで続いたことが確認できる。この月刊誌の趣意は、第1期の楊度が執筆した「遊學訳編叙」に書かれているように、欧米の西洋文明に追いつこうとする移行時期に、書籍や新聞などを翻訳し編集して、遊学していない者に西洋の先進な学術などを伝え、国民の進歩を図るというものであった。その内容を第1期を例に、以下の表5に示す。

表5に示しているように、「遊學訳編叙」の後に『太陽報』から訳された19世紀学術史を載せ、「教育」の欄に天津留学生張瑛緒が通訳し楊度が記録した下田歌子の中国女子教育に関する論説を掲載している。「軍事」

表5〔『遊學訳編』第1期目録〕

第1期 1902年11月14日（光緒二十八年十月十五日）	
目次	内容の題目
叙	遊學訳編叙
学術	十九世紀學術史
教育	教育論
	華族女学校監下田歌子論興中国女学事
軍事	武備教育
理財	經濟政策論
内政	新定統治蒙古制度
外交	歐州近時之外交
歴史	自由生産国生産日略述
地理	支那地理概述
時論	太平洋之競爭
	德人論在支那生計上之利害
	上野岩太郎與吳執甫京卿論教育事
世界新聞	

（出典：『遊學訳編』第1期の目録より）

の欄に民友社によって編集された「武備教育」を訳し、「軍国民」思想を紹介している。ほかには『東京朝日新聞』や『国民新聞』などを介して、蒙古統治制度や欧州外交政策などを紹介している。まさに楊度の叙文で書かれているように、書籍や新聞などを翻訳・編集して国民に西洋の先進な技術などを発信している。『遊学訳編』の発行部数や購読者数などは不明であるが、学問、軍事、経済などの西洋知識を国内に伝播させた役割を果たしたと言える。

## 結びに代えて

本稿は清末の留日学生の同郷会について特に湖南省の留日同郷会を例に、考察を試みたものである。

本稿のはじめに湖南省の留日同郷会には省全体の同郷会だけでなく、湖南省内の近隣州や県の留日学生が組織した下部の同郷会まで成立したという特徴があると述べながらも、1904年以後湖南省の留学生の増加に伴い、逐次できていった下部の同郷会に触れる余裕がなかった。それらの同郷会は留学生にどのような役割を果たしたのか、組織上では湖南省同郷会とどういう関係であったのか、今後宋教仁や黃尊三などの留学日記を利用して明らかにしていきたい。

また、清国留学生全体の組織としての清国留学生会館が成立した時に、各省の同郷会がまだ成立していなかったのが理由なのか、清国留学生会館と各省同郷会との組織関係が会館章程に記されていなかった。その後、各省同郷会の成立に伴い、会館章程も改訂され、各省同郷会の選出者からなる評議員制度を実施するようになった。今後、留学生会館と各省同郷会の関係を詳細に分析する必要がある。なお、1905年に成立した中国人日本留学生総会の目的は組織上において各省同郷会を統一し、留学界をリード

することであるが、留学生会館と連続性及び実際の運営などについて、未解決の課題が多く残っている。留学生総会の指導権を握るために、革命派と立憲派はどのように同郷会のメンバーを動員して総会の選挙に関与したのか、辛亥革命の勃発まで各省同郷会は同盟会からどのように干渉されたのか、このような様々な課題も残る。

本稿は、筆者が清末の留日学生同郷会を研究視野に入れた第一歩であり、十分な議論ができたとは言い難い。今後、関連資料の発掘をしながら系統的に留日同郷会の研究に取り組みたい。